



第二十四回 仙台城

～独眼竜の野望～

仙台城(青葉城)といえば、戦国武将の中で絶大な人気を誇る独眼竜・伊達政宗の城であり、本丸から仙台市街を見下ろす政宗公騎馬像が殊に有名です。天守閣どころか、城郭建築物がほとんどない城址でありながら、これほどに観光客を集める城も珍しいと思います。3月の震災では、本丸北西の石垣が広範囲にわたって崩壊し、大手門跡の再現隅櫓の一部が崩れ落ちるなど、大きな被害を受けたようです。しかし、仙台城は、築城以来、何度も大地震に見舞われながらも、その都度立派に修復されてきた城です。東北地方の復興への祈りを込めて、今回は仙台城の魅力をご紹介します。

北の関ヶ原と仙台城築城

仙台城の特徴の一つとして、関ヶ原後に築城された近世城郭にしては珍しく「山城」である点が挙げられます。城下町と一体化した平城(名古屋城など)や平山城(彦根城など)が主流となる中で、仙台城本丸の険しい立地は異彩を放っています。そして、それには築城の歴史が関係しています。

第16回「会津若松城」でご紹介したとおり、かの関ヶ原の戦いは、会津の上杉景勝に対して徳川家康が討伐軍を発したことからはじまった訳ですが、上方での石田三成拳兵の報を受けた徳川家康が軍勢を返すと、上杉景勝は家康を追撃せず北の最上領へと兵を向け、伊達とも戦闘状態に入りました。伊達政宗は、家康から、味方をすれば百万石を与えるとお墨付きを得ていたといい、関ヶ原での西軍大敗の報に接して上杉勢が撤兵すると、これに乗じて上杉領への攻勢を強めるとともに、居城を領国の中心近くで主要街道沿いの地へ移すことを家康に願い出しました。そして、千代の地に築城の許可を得ると、さっそく千代城改め仙台城の縄張りを開始し、翌慶長6年(1601年)には完成を待たずに入城したのです。最終的に上杉は徳川に恭順して米沢へ減封となったのですが、そのような緊迫した情勢ゆえに、仙台城は戦闘を強く意識した山城として築城され、川に囲まれた青葉山の自然地形を巧みに利用して比較的短

期間に堅固な構えを造り上げたものとなっています。本丸東側の広瀬川を望む断崖や、南側の滝の口溪谷の断崖絶壁は目も眩まんばかりで、他の近世城郭の堀と石垣を複雑に組み合わせた構造とはかなり趣が異なります。それが、野望たぎらせる遅れてきた天才・伊達政宗というイメージと重なり、仙台城を一層魅力的に見せるのかも知れません。

戦国の終焉と城域の変化

仙台城を築城し、上杉領を切り取らんとする勢いを見せた政宗でしたが、不穏な動きを警戒されてか、結局、先の百万石のお墨付きは反故にされてしまいます。また、徳川幕府が開かれると、反抗しそうな大名つぶしが次々と断行されていきます。そうした背景もあり、仙台城本丸には、崖に張り出す懸造をはじめとする壮麗な御殿や櫓群は建てられましたが、天守閣は造られていません。また、二代忠宗の頃には、すっかり世は安定し、城の機能も戦闘から行政へと変わっていきます。そして、寛永15年(1638年)、本丸から一段下った領域に新たに二の丸が整備されることになりました。これが現在、大手門正面から右側の東北大学川内キャンパスのある一帯となります。こうして、断崖絶壁上の本丸及びその麓の濠に囲まれた三の丸という山城的構造と、開けた場所に設けられた行政府の二の丸とが、特段連携するでもなく大手門の左右にそれぞれ存在するという特徴的な曲輪配置ができあがったのです。

たび重なる大地震と繰り返された修築

また、近年の発見もあり、多様な石垣も見どころの一つとなっています。仙台城は、慶長7年(1602年)に一応の完成をみましたが、江戸時代初期の比較的短期間のうちに、立て続けに大地震に見舞われています。完成からわずか14年後の元和2年(1616年)の大地震では、石垣が崩壊。政宗によってそれらは再建されますが、30年後の正保3年(1646年)にまたも大地震が起き、本丸の三階櫓がごとごと



仙台城概略図

く倒壊してしまいます。二代忠宗により石垣が修復され、櫓も再建されたようですが、さらに22年後の寛文8年(1668年)の大地震では、本丸石垣が櫓もろとも崩壊してしまいました。歴代の城の絵図を見比べると、それ以後、ほとんどの櫓や土塀は再建されなかったことが分かります。しかし、石垣だけは立派に修復され、その後の数度の大地震にも崩壊することなく、今に残されているのです。

平成9年からの本丸北側石垣修復工事では、石垣表面が歪んで膨らむ、いわゆる「ハラミ」が激しくなってきたことから、石垣の背面まで大規模に掘削して完全な積み直しが行われましたが、その際に、埋もれていた過去の石垣が姿を現しました。一番奥からは、自然石をほぼそのまま積み上げた「野面積み」という技法で造られた石垣(第Ⅰ期)が発見されましたが、勾配はかなり緩く、途中で段が設けられていました。これは、臨戦態勢の中、自然地形を利用して短期間に築かれた政宗時代のものと考えられています。その手前側に発見された石垣(第Ⅱ期)は、自然石を多少加工した石が混じり、より急勾配で上部まで一気に積み上げたもので、元和2年(1616年)の大地震で崩壊した第Ⅰ期石垣を土台に使いながら、より進んだ技術により再構築し

たものと考えられています。そして、最前面の石垣(第Ⅲ期)は、石を切り出して表面にほとんど隙間が無いように積み上げた、いわゆる「切り込みハギ」という技法によってさらに急勾配に構築されたものでしたが、これが寛文8年(1668年)の大地震で崩壊した第Ⅱ期石垣を最先端技術で再構築したものと考えられています。解体時の調査により、第Ⅲ期石垣の裏側には、玉石を敷き詰めた「裏込め石」と、その背後で土の圧力を受け止める階段状の石列が配置されていたことや、排水路とみられる玉石の層が形成されていたこと、さらに、奥行きを細長く整形した石の間に石の加工片や鉄の楔を挟みこんで巧みに角度調整が行われていたことなどが分かりました。そうした様々な工夫を凝らしたことで、第Ⅲ期石垣は、その後の数度の大地震にも耐えて現代まで残ったのだと思われます。これらの遺構は、石垣技術の発展を知る上で大変貴重なものであったばかりでなく、比較的短期間のうちに繰り返し起こった大地震のため、仙台における石垣技術が急速に発達したことを物語るものでもありました。過去の石垣は、修復された石垣の奥に元どおり埋め戻されましたが、本丸の一角に第Ⅰ期と第Ⅲ期石垣がモデル展示されており、石垣の裏側構造を含めて、その築造技術の進展の様子を見ることができるようになっています。

仙台を見守る政宗公

有名な伊達政宗公騎馬像は、上記修復された本丸北側石垣の上に建っています。青葉城資料展示館の方のブログによると、3月の震災では、本丸東南の崖際や北側石垣近くの地面に亀裂が入ったということですが、騎馬像は無事だったようです。元和2年(1616年)の大地震の時は、政宗の治世でしたから、当時は城の再建を指示しながら、城下が復興していく様子をここから見ていたのかも知れません。今は、仙台のシンボルとして、街の復興を見守っています。



伊達政宗公騎馬像



本丸から仙台市街を望む

1) <http://blogs.dion.ne.jp/honmarukaikan/>